

ナガサキ・ユース代表団 2020 活動レポート

YOUTH REPORT

vol.8

私たちの未来のために



FOR OUR
FUTURE!



7 QUESTIONS ABOUT US

ナガサキ・ユース代表団 に関する7つの質問

Q1.

ナガサキ・ユース代表団って何?

「核兵器廃絶長崎連絡協議会」(PCU-NC)（右ページ囲み参照）が主催する人材育成プログラムです。2013年に第1期生の活動が始まりました。次世代を担う長崎の若者が、核兵器や平和の問題を実践的に学び、この分野で活動する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることを目指しています。被爆から75年が過ぎ、被爆者無き時代の到来を見据えての被爆地からの核兵器廃絶のための発信に貢献する若者が育つことを願ってのプログラムです。

Q3.

費用は誰が負担するの?

A. 活動にかかる費用は、勉強会の開催や報告会の開催、報告書の作成等基本的に核兵器廃絶長崎連絡協議会が負担します。また、活動内容に海外での活動が含まれる場合は、渡航費および滞在費として一人当たり最大で20万円の補助金が支給されます。海外への渡航に際し20万円を超える部分は個人負担となります。

Q2.

誰が応募できるの?

A. 募集対象は、長崎県内に在住・在学・在勤の大学生・大学院生、および同程度の年齢の若者です(18~25歳を目安)。高校生(応募時)は不可。国籍は問いません。核兵器問題をに関心があり、本プロジェクトの活動を通して、こうした分野での知識や経験を得たいと希望する若者、公式の活動期間(任命時から翌年8月31日まで)が終了した後も何らかの形で『核兵器のない世界』の実現のための活動にかかわっていく意欲のある若者を求めます。大学での学部や専攻等は問いませんが、日本語・英語での一定のコミュニケーション能力は必須です。また、活動に求められる知識を得るために勉強会や、企画、準備のためのミーティングに原則すべて参加可能で、他のメンバーと協力してプログラムに積極的に参加する姿勢が求められます。

Q4.

誰がメンバーを選ぶの?

A. 選考は2段階で行われます。1次審査は志望動機などが書面審査されます。2次審査は日・英による面接です。長崎大学及びRECNAの教員だけではなく、他大学の教員・英語のネイティブスピーカー、長崎県、長崎市の担当者の参加も得て審査を行います。

Q5.

核問題を専門的に勉強して いなくても大丈夫?

A. 大丈夫です。選考後の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学ぶ機会があります。長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）の教員に加え、学外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。第8期生の場合は、任期中に30回以上の様々な勉強会と集中講義を受講しました。

Q6.

具体的な活動内容は?

A. 大原則は『自分たちのプログラムは自分たちで創る』です。第8期生はコロナウィルスの拡大による渡航制限やニューヨークでの核不拡散条約（NPT）再検討会議の延期により、当初の活動計画を大幅に変更することになりました。結果として主にインターネットを使って様々な活動を展開しました。核軍縮と平和に関する国際的なセミナーやシンポジウム、ウェブ会議への参加、オンラインでの国際プレゼンテーションの主催、国連の軍縮担当者との意見交換、そして核軍縮の分野で活動している様々な人々との交流などです。こうした活動はまたSNSを使って発信され、多くの人々に共有されます。参加者一人一人が自分の興味や関心、目標に沿って、オリジナルな活動プランを立てていく、というのがナガサキ・ユース代表団の活動の醍醐味と言えるでしょう。

Q7.

任期後の予定は?

A. 長崎県、長崎市、長崎市民及び一般市民の方々への活動と成果の報告を行い、8月末の任期満了を迎えた後は、「ナガサキ・ユース代表団」のメンバーとして活動する義務はありません。しかし、一人一人が自分の経験を活かし、何らかの形で核兵器の問題に関わっていくことが奨励されます。実際に、ナガサキ・ユース代表団のメンバーだった学生には、全国での平和教育の出前講義や講演、取材、また国際交流イベントへの参加などの依頼が多数舞い込みます。義務ではありませんが、核兵器廃絶長崎連絡協議会からそれらの依頼への協力を要望されることはありません。また、核兵器廃絶長崎連絡協議会やRECNAが主催する核問題のセミナーやシンポジウム等、様々なイベントに参加することで、さらに知識や経験を積んでいくことも可能です。ナガサキ・ユース代表団での経験を踏まえて、大学院で核問題を専門に学ぶ道を選んだ人もいます。

『核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)』って何?

「長崎が核攻撃を受けた人類最後の都市に」と願う長崎県民、市民のため、長崎県、長崎市、長崎大学の三者が一体となって、核兵器廃絶に取り組むための枠組みを構築することが検討され、2012年10月4日に核兵器廃絶長崎連絡協議会（PCU-NC）を設立いたしました。

また、一般会員の長崎県、長崎市、長崎大学に加え、長崎平和推進協会及び国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館も特別会員として参画しております。

学び、視野を広げた4ヶ月。

中村 楓（長崎大学多文化社会学部 2年）

任命されてから、4月までに約30回の勉強会を行いました。自分たちは何に興味があるのか、どのような知識が必要なのかを話し合い、核兵器廃絶研究センター RECNA の先生方にとどまらず、元軍縮大使の方やジャーナリストの方など、様々な方に自分たちが直接連絡をとり、講師をお願いしました。また、座学だけでなく、遺構巡りといった実際に自分たちの足でその場所に赴くといった体験もできました。これらを通して、NPT再検討会議の各国の声明文や現代の核兵器に関する技術や情勢、放射線、平和教育、外国人被爆者、被爆体験などについて学ぶことができました。さらに、多くの講師の方々と対話し様々な意見を聞くことで、知識を得るだけでなく自分にはなかった新たな観点を手にすることことができ、自身の考え方を広げるきっかけにもなりました。学ぶ機会を増やすことも、深い学びを得ることも自分次第であると強く実感することができました。



過去を経て、現在を学ぶ

高見 すなお（長崎大学多文化社会学部 3年）

数多くの勉強会の中で特に印象深かった2つを紹介します。1つ目は長崎の被爆者である池田松義さんに被爆体験を聞いたことです。1945年8月9日当時、池田さんは7歳でした。防空壕を掘る作業をしていたため多量の放射線等を浴びることなく助かったそうです。しかし、たった7歳で御家族を全員亡くされました。そして御家族を自らの手で荼毘に付した（目の前で火葬した）そうです。核兵器の使用が生身の人間にもたらし得る効果は到底計り知れません。一つ一つの「体験」に私たちはいつまでも耳を傾ける必要があります。

2つ目はRECNAの中村桂子先生に講師を務めていただき、各政府のNPTに対する声明文を読み解いたことです。先生が教えてくださったことは「書かれていないことを読み取ることです。例えば、2019年のアメリカ合衆国の声明文には「アメリカは核軍縮に貢献している」と明記されていますが、一体「どのように」貢献しているのか、そして実際「どのくらい」貢献しているのか、といったことに関して私たちは関心を持つべきだと思います。



広島合宿～命の重み～

岩高 史織（長崎大学多文化社会学部 3年）



今年の2月中旬に2泊3日で広島合宿に行きました。合宿のテーマは「非核化に向けた取り組み～ヒロシマとナガサキを比較して～」です。合宿では、広島市立大学の平和研究所の先生方から講義を受けたり、広島の被爆遺構を案内してもらったり、学びを深めることができました。中でも広島平和記念館を訪れたことが最も印象に残っています。それまで私は原爆投下による被害者の人数をただの“数字”として捉えていました。しかし実際にはそうではないということに展示品を見て気づかされました。原爆によって亡くなられた方々の一人一人には家族や友達、大切な人がいたはずです。しかし原爆は、そんな一人一人の人生を無条件に、無差別に終わらせてしまった



のです。原爆による被害は数字だけでは到底計り知れません。

展示品は涙なしでは見ることができませんでした。将来、同じ過ちを繰り返さないために、私たち若者が何か行動を起こさなければいけないという思いを強くしました。また合宿を通し、メンバー間の絆も深めることができ、充実した3日間となりました。

縮まった、世界との距離。

川村 和輝（長崎大学大学院工学研究科修士1年）

3月後半、新型コロナウイルスの影響でNPT再検討会議の延期が発表されました。それに伴い、私たちのニューヨークへの渡航および国連への参加が中止となりました。初めはこれからどうしていくべきわからず落ち込んでいましたが、悪いことばかりではありませんでした。世界中のNGO団体によるオンラインイベントに、気軽に参加できる機会が増えました。その他にもオンラインで各国の政府からお話を伺ったり、アメリカの大学生とディスカッションする時間を設けたりと、世界との距離がぐっと近づい



た気がします。また、自分たちにも何かできることはないかと何度も議論を重ね、オンラインイベントを主催することにしました。長崎の若者として、「多くの方に核兵器の問題を身近に考えてもらいたい」という想いを軸に、伝え方に工夫を凝らしました。初めはなかなか意見がまとまらず苦労しましたが、議論を続け、イベントの準備を進めていきました。



人類みなヒバクシャになり得る、 人類みなヒバクシャを生み得る

篠島 葵 (長崎大学環境科学部 3年)

5月下旬に、Zoomにて英語でオンラインイベントを開催しました。イベントの題名は『人類みなヒバクシャになり得る、人類みなヒバクシャを生み得る』です。核兵器が存在する世界に生きる私たちは、ヒバクシャになり得るリスクを抱えており、核兵器の存在を認めし、頼ることで逆にヒバクシャを生む側に立つかもしれない。このようなメッセージを、核兵器の現状や戦争加害の歴史など様々な観点から説明しました。イベントは国内外の様々な地域から約90名にご参加いただきました。参加者から「核兵器問題について、より身近に感じることができた」という感想もいただきました。8期生初の主催イベントが、「英語」と「オンライン」という慣れない環境で苦労する場面もありましたが、全員で協力し、想いを伝える場を作り上げることができました。



How to ask questions

Direct questions

- Comment "I have a question" in the comments section.
- We call your names in turn.

Questions in the comments

- Please write your questions down.
- We read it and answer the question.



今、私たちにできること。

谷口 萌乃香 (長崎県立大学国際社会学部 3年)



6月下旬から7月上旬にかけて、長崎県内の中学校に赴き、平和出前講座を行いました。それまでは勉強会や合宿などで、情報や知識を吸収する機会が多かったのですが、逆に自分たちが発信する側となると、他人に自分たちの意見や考え方を伝える難しさを痛感しました。世界には核兵器を巡る様々な考え方があることを理解してほしいという思いから、生徒たちには私たちの考えのみではなく、多面的な視点から伝える努力をしました。また、6月27日にはRECNA主催の核兵器廃絶市民講座に、パネリストとして登壇しました。「新型コロナウイルスと核兵器に関する報道の差」「若者に核兵器問題を身近に考えてもらうにはどうすべきか」などのテーマについて議論し、それぞれが自分の意見を堂々と述べることができました。そして、参加者からの質問や意見から学んだことも多くありました。このように、幅広い世代の方々と核兵器問題について意見を共有したこと、私たちも視野や考え方を広げることができました。



For Our Future～つなげる平和の輪～

三宅 凜（長崎大学多文化社会学部 3年）



7月25日、8期生集大成のイベントである『For Our Future～人類皆ヒバクシャになり得る、人類皆ヒバクシャを生み得る』を開催しました。5月のオンラインイベントにてご回答いただいたアンケート結果を参考にしながら内容を改善し、「1人でも多くの方に私たちの考えを理解してもらいたい」という強い思いを持った



て、日本語でのイベント開催に至りました。アンケートでは「核兵器の問題は全人類の問題であるという新しい発見を得た。」という感想もいただき、達成感と、今後の活動に向けたさらなる情熱を抱くことができました。そして、8月9日。私達ユース8期生々が、これまでの数ヶ月の学びを振り返りながら平和記念式典に参加させて頂きました。被爆者代表の方や長崎市長のお言葉から、若者である我々に引き継がれた平和のバトンの尊さを再確認し、身が引き締まる思いでした。今後も、一人ひとりが平和活動のフィールドを広げ、さらに活躍していくつもりです。

教員からのメッセージ

吉田 文彦 RECNAセンター長

ナガサキ・ユース代表団（NYD）に必要なものは何かと聞かれたら、「開拓者精神」と答えたい。核廃絶に至るまでに撤去しなければならない厚い壁の数々。たくさん的人が力を合わせないと達成できない世紀の大事業が、核廃絶だ。その目標に達成に向けて、一人でも多くの人に共感を広げるべく、メッセージを開拓していく若者たちがNYDに集っている。メッセージの開拓は考えの開拓でもあり、言葉も開拓でもある。逆風にも負けない精神力の開拓もある。コロナ禍の制約の中でもぎましい成果を残したNYD8期の目には開拓者の輝きがあった。若い世代は短期間のうちに大きく成長する力を秘めている。後に続く9期もその後も、メッセージの開拓にチャレンジし、成長してほしい。

鈴木 達治郎 RECNA副センター長

8期生の活動は、「パンデミック」時代におけるユース活動の新たな可能性を示してくれました。新しいメッセージも若者だけではなく、世界の多くの人に届いたと思います。まさに Well Done!! さて、ユース代表団の皆さんには「被爆者の証言を直接聞ける最後の世代」と言われています。それに加え、私が伝えたいのは、皆さんこそ「核兵器をなくすことのできる世代」だということです。戦後100年、2045年にはナガサキ・ユース代表団も33期生になっています。それまでに、皆さんが核兵器の廃絶を実現するリーダーには是非なってほしいと思います。私たちも、ユース代表団OB/OGとともに9期生と心を合わせて、2021年の活動を盛り上げていけたらと思います。

中村 桂子 RECNA准教授

コロナ禍で物理的な移動が制限される中、平和や核兵器関連のテーマでも、オンラインを活用した取り組みがかつてない勢いで広がっています。インスタグラムを通じた原爆資料館のバーチャルツアー、Zoomを使った被爆者との対話、遠隔地で活動する若者同士のディスカッション....もちろん人々が直接出会うことの重要性は変わりませんが、さまざまな困難さがある《今》ならではの、新しい知恵と行動力が生まれているのです。若者の皆さん、こんな時代だからこそ、新しい可能性にチャレンジしてみてはどうでしょうか。たくさんのワクワクする経験を重ねてきたナガサキ・ユース代表団のOB/OGと、全力で活動をバックアップする教員・スタッフが皆さんを待っています！

広瀬 訓 RECNA副センター長

被爆75年の「節目の年」に、コロナ禍の拡大という予想もできない状況の下で、8期生のメンバーは様々な工夫を凝らし、むしろ従来よりも活動の幅を広げてくれたと思います。そしてユースの活動には、まだまだ多くの可能性があることを証明してくれたと感じています。これから世界、核兵器、パンデミック、環境問題、私たちがこれまで経験したことのない状況が訪れつつあるかもしれません。しかし、未知の状況は未知の可能性をもたらしてくれるものです。そしてその可能性を見出す若い世代のリーダー役としてのナガサキ・ユース代表団の活躍を期待しています。

OG&OB VOICE

光岡 華子 5期生

(長崎大学多文化社会学研究科修士課程2年)



自分の無力感を思い知られた経験から原動力を得た私は、教育学部3年次に5期生に応募し、様々な出会いの中で大きく視野が広がりました。長崎出身ではありませんでしたが、大切な仲間、被爆者や前を行くかっこいい大人達との出会いを通じ、突き動かされるように活動に臨みました。今までにない考え方や感情との出会いもとても大きく、今の自分に繋がっていると感じます。知り、学び、考え、動き続けることで、自分の中に築かれた“当たり前”はいつも崩されます。しかしその経験はとても大きな財産です。「核兵器はなくすべき」という考えも、全ての人が抱いているわけではありません。それでも“人”的意志によって、変化が起きています。核兵器というとても遠く大きく思える存在でも“人”が働きかけることで変わらぬだと身に染みて感じました。あなたもぜひ、まだ見ぬ世界に触れてみませんか。すべては今この瞬間に何を選択するかであり、自分次第です。自分が知っている世界だけが全てではないと、存分に思うことができる経験が待っています。

牟田 麗 7期生

(長崎大学多文化社会学部3年)



私は7期生としての活動を終え、留学しました。留学先で外国人と授業で議論を深める中で、日本の被害面や加害面・現在の歴史の学び方など多くのことを聞かれ、話し合う場面もたくさんありました。ユース代表団として1年間多くのことを学び、積極的に行動し経験したおかげで海外でもより深く自分の関心のある分野を追求し、今もなお自分自身の成長につながっているのだと思います。ユースとして活動する中で様々な葛藤や努力、出会いや経験があります。この濃い時間を一生懸命に楽しみながら過ごしたことが、これからももっと様々なことに挑戦していく力となり、活動を終えた後もその延長線上にいるのだと思います。“想い”を“行動”に変えてみたい、世界情勢を多くの経験と共に学んでみたいなど思う方は是非ユース代表団にチャレンジしてみてください。知識だけではなく、プレゼンテーションスキル、コミュニケーション能力など多くの分野でレベルアップできます。これから先もナガサキ・ユース代表団の活躍が続き、また多くの方々にユース代表団の活動を応援していただけることを願っています。

■ 編集発行責任

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

※PCU-NCは、長崎県、長崎市、長崎大学の3者による核兵器廃絶のための協議体。

核兵器廃絶
長崎連絡協議会
PCU-Nagasaki Council

永江 早紀 6・7期生

(留学準備中)



みなさん、こんにちは!ナガサキ・ユース代表団6、7期を務めた永江早紀です。ナガサキ・ユース代表団は、核兵器廃絶というテーマのもと1年間活動しますが、一つひとつの活動を自分たちで企画し実行します。例えば、私は国内での平和出前講座や他国の学生との交流の機会を企画しました。つまり、「やりたい!」を自主的に実現することが出来るのです。今年、被爆75周年を迎えることになりました。今日まで、後世のためにと被爆体験を継承してきてくださった被爆者の方々に深く感謝をする一方、そのバトンを直接受け取ることが出来る私たち世代の重要性を、これまで以上に感じています。このバトンをさらに後世に渡していくためには、「自分はどうしたいのか」「自分はどんな世界で生きていきたいのか」を考える必要があると思っています。ナガサキ・ユース代表団には、それをじっくり考え、見つけた答えを可視化し、実現するために、協力してくださる大人の方々、そして何より、一緒に取り組む仲間がいます。若者世代の先駆者となるナガサキ・ユース代表団の更なる活躍を楽しみにしています。

矢野 大輝 7期生

(長崎大学工学部3年)



私が最近読んだ本の中で思想家の内田樹がこのようなことを言っています。学び始め、途中、終わりで「学びの主体そのものが別の人間である」というのが「学びのプロセスに身を投じた主体の運命」だと。異なるバックグラウンドを持つ人達が集まると、時に自分とは異なる価値観や考え方で驚くことがあります。自分の無力さや無知さに打ちひしがれることもありました。しかし尊敬できる仲間や先生方からの言葉に耳を傾けながら、自分自身をしっかりと見つめ深く考えることができる貴重な時間を経験できました。任期中数多くの失敗を経験し、終わった後に気づくことも多く反省も尽きません。それでも活動前と後の自分自身には多くの変化があったと思います。みなさんもきっとユースをやった後では今では想像もつかないような人になっていることでしょう。ワクワクと期待を持って是非ユースに挑戦してみてください。ナガサキ・ユース代表団がみなさんにとってかけがえのないものとなりますように。

■ お問い合わせ先

核兵器廃絶長崎連絡協議会(PCU-NC)

〒852-8521 長崎市文教町1-14
(長崎大学核兵器廃絶研究センター(RECNA)内)

TEL : 095-819-2252 / FAX : 095-819-2165
<http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/pku/>

「ナガサキ・ユース代表団」公式 Facebook ページ
<https://www.facebook.com/nagasakiyouth>

facebook

ナガサキ・ユース代表団

